

千

姫

(下)

千 姫（下）

河出新書

昭和 30 年 12 月 20 日 第 1 刷発行

¥ 100



河出書房

著 者 ^{むら}村 ^{かみ}上 ^{げん}元 ^{せう}三

東京都千代田区神田小川町 3-8

発 行 者 河 出 孝 雄

東京都千代田区飯田町 1-23

印 刷 者 中 内 佐 光

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河 出 書 房
神田小川町3-8

臨印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします



著者照影

目次

女 三 人……………	六	人それぞれに……………	五
風 流 陣……………	一〇	五人の盗賊……………	五
本多平八郎忠刻……………	一四	真田六文銭……………	一〇
脅える淀君……………	一八	落城前夜……………	一五
和 議……………	二三	生 別……………	一五
坂崎出羽守成正……………	二七	五月八日……………	二七
見憶えのある顔……………	三三	地獄の門……………	三三
千成瓢箪……………	三五	めぐり会い……………	三八
道明寺合戦……………	三九	一期の恋……………	三七
遺恨の敵……………	四四	祖 父……………	四二
一 騎 討……………	四七	大坂落城……………	四六

父と子……………	九	勾坂くずれ……………	一五四
大津の宿……………	一〇三	失せた人……………	一五九
追分道……………	一〇六	大盗の家……………	一六三
江戸下向……………	一〇〇	一期一会……………	一七〇
海風……………	一〇四	虚ろな眼……………	一七三
むかしの疵……………	一〇九	武蔵野御殿……………	一七八
十年の悪夢……………	一一三	生きる望み……………	一八〇
竹橋御殿……………	一一六	天寿……………	一八三
大樹倒る……………	一二三	作者附記……………	一八六
華やかな翳……………	一二六		
侍の意地……………	一二四		
涙痕……………	一二六		
金紋……………	一二〇		

千

姫

〔下〕

女 三 人

徳川家康は、十月二十三日、二条城へ入った。それより少しおくれて將軍秀忠は、十一月十日、伏見の城へ到着した。

寄手の関東勢は、総軍二十万と称した。

これより先、大坂近くに迫っていた東軍の本多美濃守忠政、藤堂和泉守高虎などの軍勢は、大坂方の將、薄田隼人正兼相、山口左馬助弘定などの軍勢との間に小競り合いをくり返していたが、それはまだ戦闘というまでの動きには入らない。

十一月十九日、東軍の蜂須賀阿波守至鎮が、大坂城の西南の守り、得多が崎を奪い、ついで東軍の水軍の將向井將監忠勝が新家村を占領して、大坂船手の守備地点を破るなどのことがあり、ついで博労が淵の要害も失って、開戦第一日に、大坂方は、全軍の士気を挫かれた。

二十一日、家康は、本多正純の進言を入れ、両軍の

和議を計るため、密使を大坂城内へ放った。それは、大坂城から脱出して東軍の大野奄岐守の軍勢に捕えられた者で、大坂方の大野修理亮治長の足輕与助という者だった。

この男を使うのがよい、ということになり、本多正純は、与助に密書を与え、大坂城へ帰らせた。

この密書を読んでから、城中の織田有楽、大野修理などは、条件次第で和議に応ずることとし、有楽の家臣村田喜蔵、修理の家臣米村權左衛門の二人が、茶臼山にある家康の本陣へ向った。

これが二十四日のことであった。

千姫は、すでに自分の意思のまま、十月十八日に、笹の丸から城内の本丸に移っていた。

淀君も、秀頼も、同じ本丸の屋根の下にいる。だが、住むところはべつべつであり、本丸に移ってからあと、淀君に挨拶したきり、まだ秀頼とも対面していない。

表と裏とのきびしい城中であり、しかも秀頼は全軍の総帥として、毎日、城内の千疊敷へ出て、鎧を解く間もなく軍議を練っている。

だから、名ばかりの妻とはいえ、千姫と語り合う時もない、といえはそれまでだが、秀頼が奥へ帰ると、そこにわごの方が、二人のあいだにもうけた男女二人の子と共に待っているのであった。

同じ屋根の下で、と考えると、千姫も嫉妬を覚える年頃になっている。しかし、はしたなくそれを口に出して言える身ではなかった。

小野のお通が、絶えず側にいて、千姫を慰めようと心を使っている。いってみれば、本丸の中にいても、ここだけは、いままでと同じような別世界なのであった。

「今日は、和議のご相談がござりまするそうな」

とお通が千姫へ報告したその二十四日の昼ごろ、千姫の居間には、ちょうど二人のほか、久美しかいなかった。

赤座主膳正の兵に救われ、久美が、堺から無事に城内へ連れ戻されて以来、三日ほど久美は床に臥つたが、起きられるようになって、ほとんど口を利かない女になった。

久美を堺へ密使に出したあと、お通は、すぐに江原

与右衛門の家来に、あとを追わせたのだが、これも槇島玄蕃じまげんぱの軍勢にさえぎられ、堺へ入ることが出来ずに、空しく大坂城へ引返してきた。

だから、久美の働きは無駄になったことになる。それが、久美の心を痛めつけ、精神的な負担になって自分を責めているのであろうと、はじめはお通も推量していたが、そうではない、ほかに何かあったのだ、と気がついたのは、この二三日であつた。

「久美」

お通から、今日は和議が行われていると聞いて、千姫も、いくらか気持が晴れて行くような気がして、久美に声をかけた。

「は」

久美は、千姫の坐っている上段の間のほうへ、膝で進みよつた。

「そなた」

と千姫は、やさしい眼を向けて、

「堺で、何やらあつたのではないか」

そう訊かれても、久美は答えなかった。

手をつかえ、うなだれたままにいるうちに、久美の

細い肩が、小きぎみに震えはじめた。

そばから、お通も、じっと久美を見ていたが、

「いまここには、姫君のほか、わたしとそなただけ。

甘える気持でもよい。包まず申し上げたがよい。そなた、もしかしたら、清藤孫四郎という人と会うたのではないか」

答える代りに、久美の口から、押し殺した嗚咽の聲が、うっと洩れた。

はしたない、と心づき、押えようとすればするだけ、嗚咽はとまらなくなり、ついに久美はすすり泣いた。

障子に冬の陽ざしが明るく当って、百舌鳥もずであろうか、庭のほうから鳥の声が聞える。

城外では和議が行われ、城内でも、和戦いずれか、と不安な空気がみなぎっている中に、この千姫の居間だけは、平和で静かであった。

「久美、どうしやった」

微笑を浮かべながら、お通がうながした。

「遠慮せずに、そなたの胸にあること、申し上げるがよい」

「は、はい」

ようやく、久美は答えた。

自分だけのことを千姫の前などで、と思う気持もあったが、だれかに打明けて聞いてもらわねば、しまいには氣も狂いそうな氣がする。

いっそも何かも話してしまったら、さっぱりするのではないか。それに、自分が、こういうことを甘えて話が出来るのは、千姫とお通のほかにはない、と思うと、ようやく久美は覚悟が決った。

「申しあげまする」

そういつて久美は、お通には話してあることだが、十二年前の清藤孫四郎との別れから、京の織田屋形でのこと、こんどの堺でのめぐり会いなどを、隠さずに何もかも話した。

ときどき涙がこみあげ、久美の声は途切れ、長い時間がかかって話し終ったとき、もうたまらなくなった久美は、千姫の前だということも忘れて、畳に突っ伏して、わっと泣き出した。

千姫もお通も、しばらく黙っていた。

「さても、さても」

とお通は、ほっと吐息をして、

「哀れな恋」

つぶやいてから、気の毒そうにいった。

「姫君のお袖にすがって、何かして頂こうにも、対手がそれではのう」

千姫も、いつとはなしに眼に滲んでくる泪を、そつと拭ってから、

「わらわにも、どのようにしてつかわけばよいか、判りませぬ」

そういって、悲しげな微笑を浮べると、

「恋と申しても、どのような心地が恋なのやら、千は知らぬ」

その一言は、ぐさりとお通の胸を貫いたような気がした。

千姫は、いまだに恋も知らぬ女性であった。

「はしたないことをお耳に入れ、おそれ多く」

といって、身をもんで泣く久美を、千姫は、いたわりの眼で見ているよりほかはなかった。

「久美」

と、お通は呼びかけて、

「そなたの考えが、狭すぎる。後刻、わたくしが、ゆつくりと話して聞かせて進ぜよう。本当の恋とは、そのようなものではない筈」

さとすように、また、叱るように声をかけた。

「はい」

久美の短い返事の中には、お通がどう言おうとも、孫四郎を恨む気持は変らぬ、という強さがある。

そこへ、江原与右衛門が、ただならぬ顔色をして、伺候してきた。

「申し上げます。両軍の和議は破れ、間もなく、また戦いが始まりまする」

と、与右衛門は報告した。

大坂方が、城の総曲輪の塀矢倉を取り払う、とまで折れて出たのに、正純は、塀矢倉はこのたび新規に作ったもののゆえ、二の丸、三の丸まで取りこわすべし、と言ひ出し、和議は破れたのだという。

「戦いが」

つぶやいて千姫は、美しい眉のあたりを、さっと曇らせた。

風 流 陣

文がやりたや室町筋へ
取りや違えて

余の人にやるな
花のかの様の手に渡せ

水の匂いを含んだ冷たい夜風の中を、三味線の音色
と一緒に、きれいな女の唄声が流れてくる。

いつもなら、聞く者にも浮いた気持を誘うのだろう
が、いまはそうではない。

昨夜まで、南の今福から淀川べりへかけて、さか
んに聞えていた東西兩軍の砲声、銃声、関の声も、今夜
は嘘のように、ぱったりと絶えている。

大坂城にとって、北西から来る攻撃を支えるための
一ばん重要な防禦線である今福から鳴野へかけての陣
が、取りつ取られつしたあげく、昨日、慶長十九年十
一月二十八日の夜、完全に徳川方の佐竹義宣、上杉景
勝の軍勢に破られ、西軍は大坂城へ退いてしまったか
らであった

一日のうちに、上杉と佐竹の連合軍は、今福、鳴野
に付城を築き、北西から大坂をおびやかそうとしてい
る。

だから、今福から北へ、三国川を二十町ほどさかの
ぼったところにあるこの神崎の町も、いまは戦線の後
方になった、という安心からか、一たんは逃げ出した
土地の者たちも、また家財道具を車に積んで、自分の
家へ帰ってくる者が多い。

ここは、正しく言えば摂津国河辺郡神崎といつて、
古く平安朝のころから、上方では名代の遊女町であつ
た。

平安京のむかしは、西国から京へのぼる船は、淀の
川尻へ入り、三国川を経て京へ向うのが例になってい
ただけに、その川筋の西岸にある神崎、対岸の蟹島、
淀川が三国川と分れる江口などという船着場には、い
つの間にか遊女町が出来て、繁昌を続けてきたものら
しい。

後に、大坂冬の陣と呼ばれるこんどの戦いが始まっ
てからも、戦陣の中で慰めを求める習いは武士もまた
変わらず、はじめは大坂方の将士で、この神崎の遊女町

も賑わっていた。

開戦以来およそ十日、新家村、得多ガ崎、博勞ガ淵など、大坂陣の前哨戦の奪取戦がくり返され、ゆうべ今福は徳川方の手に帰したが、まだこの神崎には、徳川勢の将士は入っていない。

それは、今福の確保、博勞ガ淵への攻撃準備などのため、この方面の徳川勢に少しの余裕もないからであった。

大坂城の南、海上への出口に当る得多ガ崎は、すでに徳川方の蜂須賀阿波守至鎮の手で攻め落されているが、その北にある博勞ガ淵の砦は、一たん徳川勢に奪われ、三日ほど前、また大坂方の勇将ゆうしょうすけだはやとのしやうかね薄田隼人正兼相の手によって奪い返されてしまっている。

博勞ガ淵を薄田兼相が守っている以上、徳川勢は、海上からする大坂城攻撃を阻まれたことになる。

この二十八日の戦況は、いわば両軍が互いに楔くさびを打ち込み合って、戦線が交錯した状態になっているのであった。

そういう切迫した戦況も、この神崎の遊女町にとっては、大した問題ではない。勝ったほうの将が、銀や

銭を持って遊びに来てさえくれれば、それで商売はやって行ける。

将兵にとっても、明日は失ういのちかも知れないと思えば、思い切って金を使うので、こういう遊女町にとっては、戦さの時は書き入れ時とも言える。

しかし、戦いにも関係がなく、興味も覚えず、ぼんやりと魂の抜け失せたようになって生きている、清藤孫四郎のような男もいた。

山の端やまのはに

住めば浮世に

思いの増すに

月と入るやれ

山の端に

ほかの歌が、また聞えてくる。

そこは、三国川に臨んだ河岸で、石垣の上に人ひとり通れるほどの細い道が続いている。

川のほうに、何軒もの遊女屋の裏手が向いている。窓障子越しに灯の色が洩れ、そこから歌声と三味線の

音色が流れてくるのであった。

遊女屋の羽目板に背を凭せかけ、石垣の上に腰をおろして、孫四郎は、ぼんやりと空に眼を投じている。

星もない真暗な夜で、窓からさし出る灯あかりが、

三国川の流れに、ちらちらと光を刻んでいた。

何を考える気力もなく、孫四郎は、半分は現^{うつ}のような状態であった。

あの十月十二日の堺での戦いの夜、久美とあのような別れ方をしてから二ヵ月あまり、孫四郎は、勾坂甚内とも会わず、大坂を中心とした戦場を、あちこちらと当てもなく乞食のようにうろつき廻っていた。

そうやっていたところで、大坂城の奥深いところにいる久美とめぐり会う方法が見つかる、とも思えない。また、たとえめぐり会えたところで、ああまで自分を受けつけなくなっている久美が、この自分の気持を判ってくれるかどうか、それも疑問だが、しかし孫四郎は、久美のいる大坂城を遠く離れる気はしなかった。ただ、夢遊病^{ゆめゆうびょう}者のように、うろろろと戦場に近い町や村をさまよい歩き、はるかに大坂城の天守閣を仰ぎ見て、いつの間にか泪ぐんでしまふ孫四郎であっ

た。

われながら意気地のない、と思わぬでもないが、孫四郎としては、もう一ど久美と会う以外に、なんの生甲斐も感じられずにいる。

ふと気がつくと、うしろの窓の障子の中から、太い男の声が出た。二人や三人ではないらしい。三味線と歌声は、いつの間にかやんでいる。

「見張を立てておけ。くれぐれも用心をせねばならぬぞ」

「いや、かえってこういう場所は、敵の眼がとどかぬものだ」

めいめい声は忍ばせているが、あきらかに侍であり、鎧の金具の触れ合う音、太刀を置く^け気配^{はい}などがする。

徳川方の、上杉か佐竹の将士が、遊びにきたのかも知れない。

だが孫四郎は、そういう中の様子に気も取られず、ぼんやりした眼で、暗い川面^{かわづら}を見続けている。

「裏手は大丈夫か」

と声がして、ぬっと大きな影がさすと、窓が開い

た。

外を見廻し、川をのぞいていた様子だが、窓の下にいた孫四郎に気づいたらしい。

「おっ」

びっくりした声になって、

「誰だ」

低い、かみつくように、孫四郎へ怒鳴りつけた。

「なんだなんだ、どんな奴がいる」

二三人の侍が、窓からのぞいた。

身体も動かさず、物憂い目で、孫四郎は、その窓を見あげた。

「乞食ではないか」

「立去れ、立去れ」

鎧をつけた侍たちが、口々に叱りつけた。

乞食と見たのも無理はない。月代も延びたまま、

髭も生え放題だし、着ていた小袖も売ってしまい、太刀も手放して、わずかに短刀一振を懷中に忍ばせているきりの孫四郎の姿であった。

「立去らぬと打ち斬るぞ」

となりつけられて、孫四郎は、ゆっくりと立ちあが

ると、会釈もせず黙って歩き出した。

そのまま、河岸の細い道を、南のほうに歩み去る孫四郎の後姿を、侍のひとりが睨みつけていたが、

「あいつの後姿、たしかに武士だ。おかしい」

呟いて、窓障子を閉めると、

「敵の間者かも知れませぬ」

と、いま座敷の正面にあぐらを掻いたひとりの侍へ、膝をつきながらいった。

「追って行って、斬り捨ててしましましょう」

「捨てておけ」

座敷に寛いだその侍は、声をかけた。

年のころ四十二三、よく肥った、赭ら顔で、大きな鼻の下に、髭をたくわえている。鎧の上から、法師風の布直綴を着け、袈裟頭巾をかぶって、鎧が外に見えぬ用心をしてある。

供の武士五人ほども、それぞれ鎧の上から簑や笠などを着けて、そっと遊女屋まで忍んで来たらしい。

「しかし、殿、油断はなりませぬ」

なおもそういった侍へ、あるじの鎧武者は、直綴や袈裟頭巾を、うるさそうにかなぐり捨てながら、

「つまらぬことに手間取るな。それより、ゆるりとしてはおられぬのだ。女を呼んで来い。酒を申しつけろ」

そういったのは、こんどの戦いで大坂城へ馳せ集まった浪人の中でも、ことに武勇を以て聞え、いまは博労ガ淵の砦とりでを守っている薄田隼人正兼相であった。

隼人正は、かねてからこの神崎の遊女町に、浅菊あさぎくという馴染の女がいる。

それに会いたくて隼人正は、腹心の家来五人ほどを連れ、博労ガ淵の砦は、平子主膳ひらこしゅぜんという家来に任せ、こっそりと敵の戦線を突破して、船と徒歩で二里へだてたこの神崎へ忍んで来たのであった。

「明日の朝まで、敵は動くまい。その間にこなたは、いのちの洗濯じゃ」

と隼人正は、声をひそめて面白そうに笑った。

敵の中を抜け、遊女のところへ忍んでくるのは風流でもあろうが、隼人正のような剛氣の将でなければ、出来ることではない。

本多平八郎忠刻

ほかの遊女屋から、違う女の唄声と三味線の音色が聞えている。

それを、現うつに聴きながら清藤孫四郎は、氣拔けのしたような足どりで、神崎の町を歩いていった。

辻へ出て、どちらへ曲ろうか、と足をとめたとき、左の方から、ずっと影のように歩いてくる一団の人影があった。

いくら落ちぶれても武士の果てだけに、孫四郎は、鎧よろいの草摺くさすりと太刀の触れ合う音を、敏感に耳にした。

松明もつけていない。暗い町の中を黙って歩いてくるだけだが、その五人ほどの侍たちの中に、女のように白い被衣かぎぎを頭から引きかぶった鎧武者がいる。

それが頭立った者らしく、その前後を、めいめい簀笠などで、顔や姿を隠した四人の武者が守ってくるのだが、その四人とも鎧に身を固めているのは明らかであった。

今しがた、窓の中から怒鳴りつけた武者たちと同じように、戦陣のわずかな暇を盗んで、ここへ隠れ遊びにきた武士たちに違いない。

それが、関東方であろうと、大坂方であろうと、い

まの孫四郎にとつては、どうでもよいことであつた。すれ違おうとする孫四郎を、武士たちは、じろつと睨みつけたが、声をかけることもせず、闇の中で胡散くさそうな眼を向けたきり、遊女屋のほうへ歩いていった。

「妙な奴だつたな」

と、武士のひとり、

「あの歩き方、腰のあたり、たしかに侍だが」

「天下に浪人の満ち溢れている今だ。落ちぶれた奴が、町をうろついていたとて不思議はあるまい」

年かさの武者が、そう言い放つてから、

「しかし、敵方の間者が、ここらをついておられる。その中を、若殿も、かような物好きなことなされいでも」

と、白い被衣の若武者へさういうと、

「だから面白いのだ」

その若武者は、被衣の下から低い笑聲を立てて、

「戦場で敵の眼を忍んで遊興をいたすも、これまた風流、と申しても、無骨者の内膳には判るまい」

澄んだ声で、年かさの侍をからかうようにいった。

この白い被衣の若武者は、本多忠政の嫡男、当年とつて十九歳になる本多平八郎忠刻であつた。

本多の家は、三河以来、徳川譜代の中でも名門であり、平八郎という名は、代々本多の嫡男がついで、戦場名譽の名といわれている。

忠刻の父忠政は、本多忠勝の嫡男で、伊勢国桑名十万石の城を領し、その内室は、徳川家康の長男三郎信康の娘なので、その腹から生れた忠刻や十七歳になる弟の政朝などは、大御所家康の外曾孫に当る。

だから、忠刻は、寄手の徳川勢の中で、身分や地位からいっても、ことにぬきん出た存在なのだが、忠刻は生来、奔放不羈であり、江戸に住んでいたところから、いわゆるかぶき者という、派手な日常生活を送っていた。

かぶき者という名称は、この慶長のころ、お国歌舞伎のあとから出た若衆歌舞伎の舞台姿を真似て、派手な装束で江戸市中をのし歩く侍たちを呼んだのだが、忠刻の祖父忠勝も、闊達な行状を好んでいたので、その血をひいているからであらう。

江戸にいたところから、老臣の本多内膳を手古ずらせ